

解題

東京大学が学術交流協定を結んでいるフランスのエコール・ノルマル・スーペリキュール（ENS）は、1994年に創立200周年を迎え、さまざまな記念行事がパリを初めとするフランス各地、さらには同校が緊密な関係を結んでいる世界の主要大学で行われた。東京大学でも、同校創立200周年記念事業委員会の呼びかけに応じて、交流の窓口となっている文学部・大学院人文社会系研究科の主催で、「フランスにおける文科系の高等教育——ENS創立200周年を記念して」と題する学術講演会が、昨年（1995年）6月12日、山上会館で開催された。ここに掲載する「La fondation de l'École normale supérieure」は、そこでジャン・メナール教授の行われた講演のテキストである。

当日は、メナール教授とともに、ENS創立200周年記念事業委員会から派遣されたロベール・リシャール（元フランス国大使）、ポール・バディー（パリ第7大学教授）の両氏、そして両校の学術交流協定の調印式に東京大学を代表して出席した樺山紘一教授（西洋史学）の顔ぶれで、ENSの歴史と現状と未来について、東京大学との比較も視野に収めた多彩な講演が行われ、両校の交流を深めたばかりでなく、人文社会系の教育と研究のあり方に多大の示唆を与えた。その中でもメナール教授の講演は、200年前のENSの創立の経緯とそれを導いた理念について、該博な知識に基づいて、雄大で透徹した見通しを展開して、聴衆に深い感銘を残した。

メナール教授について、改めて紹介する必要はあるまい。パスカル研究の第一人者で、長年にわたって、ボルドー大学、パリ・ソルボンヌ大学で多数の後進を育成された。退官された今も、世界各地で積極的に学会発表、講演活動を行うかたわら、画期的なパスカル全集 Pascal, *Œuvres complètes, texte établi, présenté et annoté par Jean MESNARD*, Paris,

Desclée De Brouwer, 1964-1991 (4vol. parus)の編纂に全力を傾注しておられる。日本との関係も深く、1969年以来、6度にわたって来日され、日本人の弟子も多い。特に1988年には、東京大学シンポジウム「パスカル、ポール・ロワヤル、東洋、西洋」のフランス人側責任者として、50名を越す外国人参加者を率いて来日し、シンポジウムを成功に導いたことは記憶に新しい。今回の訪日でも、ENSの創立200周年記念行事の日程の合間を縫って、パスカル研究会、日仏会館、上智大学、そして筆者の大学院演習の場で、パスカルとフランス17世紀文学に関する講演と講義を行われた。滞在期間がわずか10日であったことを思えば、驚くべき活動ぶりである。

こうしてみると、このテキストは必ずしも専門家の論考とはいえない。これは、フランス文学研究者、それも17世紀文学・思想の専門家であるメナール教授にとって、いわば余技なのである。だからといって、これが、単なる教養——それがどれほど豊かなものであっても——の産物であると考えるのは適当ではない。メナール教授のパスカル研究の特質は、文献学、歴史学、思想史の三者の高度で緊密な結びつきにあるが、同じ特質がここにも明らかに認められるからである。ENSの創立という出来事を、アンシアン・レジーム末期から七月王政期に至る1世紀近い歴史の中に置きなおし、その各段階における公教育の理想の展開とENSの胚胎と成立の過程を相関させながら跡づける。しかも問題の考察にあたっては、ENSを構成する三つの語 *école, normal, supérieur* の正確な語義と由来の吟味を導きの糸とする。そしてこの雄大かつ緻密な概観の背後には、世俗国家と教会の双方がその支配権をめぐる争った公教育はいかにあるべきかについて、敬虔なキリスト教徒であると同時に良き公民である教授自身の信念と願望が潜んでおり、それが論に深い統一を与えている。専門外の主題について、これほど明快で中身の濃い講演が準備できるとは、感嘆するほかない。もちろんこれ

は、メナール教授のたぐい稀な個人的資質に負うところが大きいですが、そこに教授が青春時代を過ごしたENSの恵まれた環境が与って力あることも確かである。

ENSは、東京大学に較べて、人員の点でも、教育・研究の環境の点でも、学生の生活条件についても、はるかにエリート校である。われわれ日本人の平等志向とは裏腹の、このような教育機関の存在が、果たして社会にとって望ましいことかどうか、ここでは問わない。ただENSの卒業生の最良の部分が、強烈な自負心と責任感に支えられて、教育と研究に邁進する姿はやはり美しい。それは、このずば抜けたエリートたちにとっては、見事に開花した才能が、真摯な *noblesse oblige* の感覚に導かれて、素晴らしい成果を生み出しているからである。ENSとの交流が、われわれにとっても同様の責任感と *noblesse oblige* の感覚を磨く機縁になることを願って止まない。

なお、このテキストの邦訳は、いずれ雑誌『思想』に掲載される予定である。

塩川 徹也